

げんでん
ふれあい **福井**

第25号

2006

SUMMER



- 福井県自然保護センター訪問
- 多景山と福井「若狭の杉田玄白(下)」
- 夏祭り「宇波西神社の神事芸能」

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的としています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にしたいと広報誌を目指します。



財団シンボルマーク

CONTENTS/25

- 岡倉天心・県「茶の本」出版100周年記念事業を併催 2・3
- 福井県自然保護センター訪問 4・5
- ふるさと福井人物シリーズ 若狭の杉田玄白 6・7
- 17年度田花蘭筆文字賞・財団賞受賞作品紹介 8・9
- 伝統芸能シリーズ「宇波西神社の神事芸能」 10・11
- 福井の文学碑「故波の舟人 種田山頭火句碑」 12
- 敦賀市博物館誌上ギャラリー／19「小野小町園」土佐光起筆 13
- 情報ファイル(18年度財団助成事業決定ほか) 14・15

FRONT COVER



国選無形民俗文化財
宇波西神社の神事芸能
(若狭町気山)

(若狭町気山)

若狭町気山に鎮座する宇波西神社は、三方五湖周辺に散在する川集落、約千戸を氏子区域とする伝統と格式高い神社です。

毎年、4月8日の春の例祭には、各集落は、村の神事を総て、当日、定められた経路で、御幣を捧げて宇波西神社に参集、大祭が行われます。午後一時過ぎ、日向区の夏辺六郎石工門家当主が拜殿前の石段に立ち、玉剣を捧げると、王の舞をはじめとする民俗芸能が、境内広場で繰り広げられます。王の舞は、海山、北庄、大鼓、金山の各區が毎年交替で奉納しますが、今年は金山区の青年が担当。舞子は、赤い鳥甲に、黒高の面をつけ、紅色の着物姿、笛、太鼓の囃子に合わせ、舞を踊るがして、古式ゆたかに、荘厳な舞いを披露します。(関連記事110、111頁・ふくい伝統芸能シリーズ)

日本美術の先覚者 岡倉天心

県・「茶の本」出版百周年記念事業を開催

明治時代に美術界の指導者として活躍した本県ゆかりの岡倉天心の著書「茶の本」(The Book of Tea)が1908年に出版されてから、今年が百周年にあたりまわ。

これを機に、県では、天心の業績について理解を深めてもらうようと、特別展示会や座談会、「茶会」を開き、天心の魅力を内外に発信することとしています。

県では、今年2月、岡倉天心が著した代表的な英文の著作3冊の初版本を購入し、これらを3月末日まで県庁編民ホールで、4月6日からは県立美術館で公開しました。

県が購入したのは、天心が、欧米に向けて茶道を中心に日本文化の特色を説明した「茶の本」(1908年刊)、「アジアはひとつ」という有名な言葉で始まる「東洋の理想」(1903年刊)、「日本の覚醒」(1904年刊)の3冊で、いずれも初版で、ロンドンやニューヨークで出版された図書です。

「美術」の面では、9月5日から30日まで、県立美術館で、特別展を開催します。

天心ゆかりの曲家・狩野芳崖の絵画をはじめ藤田春草や横山大観らの作品を中心に、天心愛用の茶道具、書籍、書簡などの資料を出品。期間中は講演会も同時開催することとしています。

「外国語」では、天心が英語に堪能で、英文による多くの著作で日本文化を世界に広めた点に注目。秋ごろ、県内の高校生を対象に、外国人講師による「茶の本」講座を開催することとしています。

また、「茶会」の面では、秋ごろ、永平寺での座談会と茶会を計画。「日本文化」をテーマに、百年後の福井県をにらみ、今をどう生きるべきかを考える座談会を行うとともに同時に記念茶会を開催することとしています。



福井市中央公園に建てられている岡倉天心の銅像

「茶の本」は、茶道を通して、東洋の美や芸術、精神の本質を英



県庁県民ホールで展示された岡倉天心著書初版本3冊



同会家の実家跡に建つ
石碑＝福井市宝永1丁目

天心の両親はともに福井県出身で、父四倉勘右衛門は福井藩士で、横浜で落の特産品などを扱う貿易商を営んでいました。天心は、その次男として、文久2年（1862）横浜で生まれました。

天心が福井を離れるようになったのは、両親に拠る所が大きいのと思われるが、それ以上に乳母つねの存在がありました。彼女は幕末の志士橋本左内（のちの橋本左内）と知り合っており、幼い天心に橋本と左内のことをよく聞かせたと伝えられています。そのため天心は橋本生まれでありながら、自筆履歴書に「旧福井藩士」や書簡に

天心と福井との関わり



天心が1906年米国で出版した「茶の本」(The Book of Tea)

岡倉天心の略年譜

年	年齢	出来事
1862 (文久2)	0歳	12月29日、福井藩士四倉勘右衛門の次男として横浜に生まれる。幼名為三郎のち為三。
1870 (明治2)	8歳	母の没 (37歳)
1875 (明治8)	13歳	東京開成学校 (のち東京大学と改称) に入学。
1876 (明治11)	14歳	フェノロリ、東京大学のお嬢い教師として来日。3年在学の天心と出会う。
1880 (明治13)	18歳	東京大学卒業後、文部省富強取調部に就任。
1884 (明治17)	22歳	フェノロサらの組織した聖国会に参加。文部省による関西地方古社調査に参加。文部省の園藝教育調査会委員となる。
1885 (明治18)	23歳	フェノロサ、狩野芳雄らとともに、美術学校設立のための調査取調部の委員となる。
1886 (明治19)	24歳	美術取調委員としてフェノロサと欧米視察に向かう。
1889 (明治22)	27歳	帝國博物館の理事及び美術部長に任命される。美術雑誌「國華」を創刊する。
1890 (明治23)	28歳	東京美術学校校長となる。
1896 (明治29)	34歳	古社寺保存会の委員に任命される。父・勘右衛門没 (77歳)
1896 (明治31)	34歳	東京美術学校校長を辞職し、行動を共にした橋本雅邦・横山大観らと谷中に日本美術院を創設。
1901 (明治34)	39歳	インド旅行に出發。
1903 (明治36)	41歳	「東洋の雄辯」をロンドンで出版。
1904 (明治37)	42歳	大観、春草、六角紫水を伴い渡米。「日本の覚醒」をニューヨークで出版。
1905 (明治38)	43歳	ボストン美術館中国・日本部顧問となる。
1906 (明治39)	44歳	4月12日福井に自かい下旬まで滞在する。「The Book of Tea」(茶の本)をニューヨークで出版。日本美術院を茨城県五浦に移転。
1910 (明治43)	48歳	ボストン美術館中国・日本部長となる。
1913 (大正2)	50歳	9月2日、静養先の新潟県赤松にて没。



東京美術学校を退任したころの天心

その傍ら「東洋の理想」「日本のその後インド、米國を回る」、明治38年、ボストン美術館中国・日本部顧問、のち部長となります。その傍ら「東洋の理想」「日本のその後インド、米國を回る」、明治38年、ボストン美術館中国・日本部顧問、のち部長となります。その傍ら「東洋の理想」「日本のその後インド、米國を回る」、明治38年、ボストン美術館中国・日本部顧問、のち部長となります。

「郷里福井」と記しており、天心の福井に対する想いは深いものがありました。また、旧三河町出身で彫刻家で、天心が校長を務めた東京美術学校彫刻科の教授山田夷斎（1864-1901）には、天心の妹・蝶子（てふ）が嫁いでおり、さらには東京美術学校の第1期生で、狩野芳崖門下の四天王と呼ばれた福井県出身の四不朗と天心の甥・岡倉秋水の2人は、天心の要請で高等師範学校に園藝教員として派遣、日本画教育の普及に努めており、福井の地と人がさまざまに天心の理想の実現に貢献したと言えます。

岡倉天心の功績

天心は、幼名は「為三郎」のち17歳の頃「寛三」に改名。明治13年、東京大学卒業後、文部省入りし、美術教育や古美術保存などの美術行政にたずさわりました。またフェノロサ主宰の審西会に加わり、新たな日本画の創造を提唱。明治19年、フェノロサらと欧米を視察しました。明治23年には東京美術学校校長となり、大観、春草らに大きな影響を与えました。その間、臨時全国宝物取調委員、帝國博物館理事兼美術部長に就任。美術雑誌「國華」を創刊し、日本の美術活動に先覚的役割を果たしました。しかし、明治31年排斥運動により東京美術学校校長を辞職、これに殉じた橋本雅邦、横山大観らと日本美術院を創設しました。



天心の旧居や日本美術院のあった地に整備された同会天心記念公園＝東京都台東区谷中5丁目

寛三「茶の本」などを次々に執筆し、欧米における東洋美術や日本文化の普及理解に務めるとともに、日本における美術行政、教育、思想に大きく貢献しました。大正2年、9月2日、静養先の新潟県赤松で50歳の生涯を閉じました。

福井県自然保護センター訪問



福井県自然保護センター・本館前画＝大野市南六呂師
(木造・鉄筋コンクリート構造3階建)

宙までを発信

5月中旬、同辺が石炭・青葉に咲える福井県立自然公園の中、平成27年開設以来、広く人気を集めている福井県自然保護センターを訪ねました。

センターの事務室で、平山昭彦子教師から「身近な自然から宇宙まで」をキャッチフレーズに、展示事業をはじめ、自然とのふれあいを通じて、色々の活動プログラムや学習イベントを実施している事を聞き、自然保護思想の普及のため、幅広い事業活動を展開していることに感動をおぼえました。

平成15年3月、自然保護のあり方を「学び・考える」ことを重視して、展示を一歩進めたという本館展示コーナーを平山さんの案内で見学しました。

自然観察へ行こう

1F

1階の玄関ホール中央には、500分の1スケールの「自然観察の森」立体模型が設けられています。

六呂師美原の自然を紹介する一方、季節に合わせて見られる生物の実物標本や「経ヶ岳の大規模崩壊地形」等も解説しています。このコーナーは、訪れた人を野外へ導く動機付けの場となっています。

福井の水辺を考える

1F

ここでは、大正から昭和にかけての初夏の水田や小川、ため池をジオラマで再現しています。観望は子供の目線で見ることができ、メダカ、カエル、トンボ、タガメ、種々の水草など生物が豊かにいた頃の身近な水辺を紹介しています。この舞台をみて、これからの水辺環境を守ることを考えるきっかけを提供するコーナーになっています。

刈込池のブナ林

1F

白山国立公園の南端に位置する刈込池の周辺のブナ林を舞台に、原生的なブナ林が現在まで保たれてきた仕組みと、森の世帯について紹介しています。

ジオラマは、数年前の台風で倒れたブナの太木とその周辺の環境を現地取材を重ねて再現した興味深いコーナーといえます。

ブナの倒木を玩物として、森林の維持機構、分解者の働き、森林の公益的

森の仲間たち

2F

ここでは、標高4000～16000mの山地帯に広がるブナ・ミズナラ帯の森林を舞台に、春夏秋冬、四季の森の生き物たちの暮らしぶりや生き物同士のかかわりなどについて紹介しています。

季節ごとのミニジオラマを通して、それぞれの季節における自然の有様を見ることができ、また、環境と生物(春、冬)、昆虫と鳥類(夏)、動物と植物(秋)の関係について、それぞれの季節でトピック的に取り上げるなど楽しく学べるコーナーとなっています。

失われ行く生物の多様性

2F

このコーナーでは、福井県で絶滅の危機にある野生生物を展示しています。

自然保護センターの前身の鳥獣保護セ

交通案内



機能について解説しています。

瞰図

失われ行く生物多様性

森の仲間たち

ビデオコーナー
山のめぐみ



「自然観察へ行こう」コーナー・1F



「福井の水辺を考える」コーナー・1F

身近な自然から宇

センターの頃から、20年以上かけて収集されてきた資料のうち、絶滅の危機にある生物を別製などの実物標本を中心に、楚河、川、里山、山地など生息環境別に展示しています。また、福井県の絶滅の恐れのある動物種についても、パソコンで調べることもできるほか、生物を守るための取り組みについても紹介しています。



「森の仲間たち」コーナー・2F



「失われ行く生物多様性」コーナー・2F

展示鳥



「刈込池のブナ林」コーナー・1F

自然を調べる
ことができます

森の学習室

ここでは、自然関係の図書やパソコン、天体望遠鏡などが揃えられ、来館者が自然について自ら調べ、学習することができます。

また、自分の生活がどれだけ自然にやさしいかをゲーム形式でチェックできる「エコロ人指数チェック」も用意されています。

窓側には、冬季に周辺の野鳥を観察できる場を設けています。

その他のコーナーでは、福井県内の自然観察地などを紹介する「福井自然観察三昧」、カゴや菜などの実物展示や人々が生活の様々な場面で、どのように自然の恵みを利用していたかを紹介する「山のめぐみ」コーナーがあります。



森の学習室・2F

観察棟

宇宙・大自然へ挑戦

本館から離れた山の上、天体など宇宙を知ることができる観察棟があります。



国内で最大級の天体望遠鏡を備えた観察棟

天文指導員の井部様さんの案内で、口径80cmの反射望遠鏡が設置されている天文台へ観察棟を見学しました。まず1階は、44名の人を収容できるプラネタリウムまで、直径5mのスクリーンで星降る夜の天空などを観るこ

とができます。

昨年度は、天体観望に延約5千人、プラネタリウムに約8千人の来館者が訪れ楽しい一刻を過ごしていました。

2階は、目の前に六日師高原のバノラマが広がり、大型双眼鏡、フィールドスコープを備え、周辺の動植物を観察できます。

3階の天体観望室には、国内で最大級の口径80cmの反射望遠鏡、口径10cmの屈折望遠鏡2台、口径20cmの反射望遠鏡3台、TVカメラ装置が設置されています。夜には、一般来館者を対象にした天体観望会（土曜日）や事前申込による主に予約団体対象の天体観望会が行われ、神秘的な大宇宙への探察で、人気を集めています。



口径80cmの反射望遠鏡

「自然観察の森」へ

当日は、雨天で外への散歩ができませんでした。センターの周辺、約28haの「自然観察の森」には、雑木林や湧き池、草原など多彩な自然環境がそろっています。

学習広場やファミリー芝生広場、自然観察小屋、アプローチ遊歩道などの遊歩道があり、自然とのふれあいの中で、新鮮な驚きや発見を体験できる魅力に溢れています。

ふるさと福井
人物シリーズ

若狭の杉田玄白

—日本近代医学の先駆者—

(下)

文／永江秀雄氏

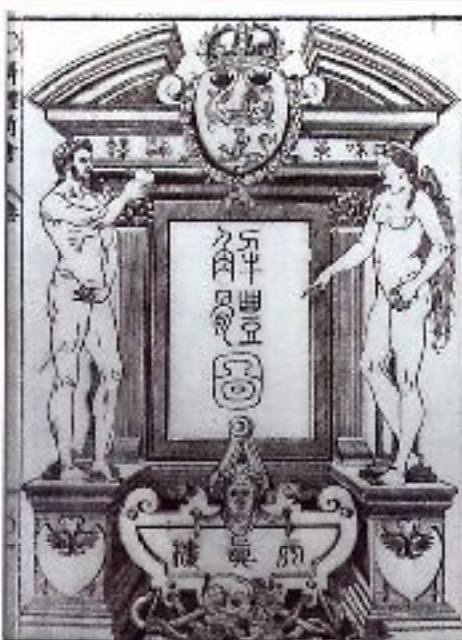
初めて見る人体解剖

明治八年（一八七二）三月四日、江戸の町奉行の家来得能万兵衛から知らされた通り、江戸千住の葛ヶ原（小塚原）の刑場で、刑死体の解剖（解剖）が行われました。杉田玄白は中川淳庵や前野良沢などと共に、これを随察（観察）するこ

「ターヘル・アナトミア」の翻訳に挑む

その帰る道々、鹿沢、澤庵、玄白の三人は、「ターヘル・アナトミア」翻訳の志を立て、その決意をしたのです。しかも、早速その翌日、前野良沢の家に三人は寄り集まり、翻訳に取りかかることにしました。

しかし、「ターヘル・アナトミア」に打ち向かってみると、まるで「艦船なき船の大海に乗り出せしが如く、茫洋として尋るべきかたなく、たゞあきれにまぎれて居たるまでなり」との、後年に明治の福沢諭吉を感泣させたという文で、その時の状況が玄白の「蘭学事始」に活写されています。文化十二年（一八一五）、八十三歳の玄白の回顧録「蘭学事始」には、わが国の蘭学の始まりと発展、特に「ターヘル・アナトミア」の翻訳、「解体新書」としての出版について



「解体新書」扉絵
小浜市立図書館蔵 福井県立文庫蔵

の苦心などが詳述されています。その翻訳に四年を費やし、十一回も草稿を書き改めて印刷に付した。玄白は筆談を絶がなければ、多病で成も取っている自分、これが完成した時には草葉の陰から見ることになると言い、若い同志の桂川村岡などから「草葉の陰」と連発されつつ、翻訳に精

PROFILE 永江秀雄氏

若狭町在住、郷土史家。福井師範学校卒業後、小学校教員、農協職員、県史編纂執筆委員、上中町教育委員等歴任。昭和57年から22年間県立若狭歴史民俗資料館嘱託として、民俗、伝統文化の調査・研究に尽力。多くの功績を残されました。平成12年、文化財保護法50周年記念特別功勞者として文部大臣表彰。同13年、げんてんふるさと文化賞を受賞。



杉田玄白肖像（石川大波筆）
早稲田大学図書館蔵

勵し続けたこと等々、心を打たれ刮目させられる記事が充満しています。

杉田玄白には、重大な「解体新書」を始め、この「蘭学事始」や前掲の「形影夜話」の外にも多数の著述があり、また、その著書や玄白の業績について、現在ま

でに歴史家や医学者、その他の方々によって発表された著書は甚だ多く、それぞれ枚挙に遑がありません。ただ、関心ある方には必読の書と申し上げたい「蘭学事始」については、精確で理解しやすい緒方富雄校註の岩波文庫本、片桐一男全訳注の講談社学術文庫本のありませう。

また、玄白の全体像や関連事項をめぐっては、私のような門外漢にも、片桐一男博士の「杉田玄白」（吉川弘文館・人物叢書）

「杉田玄白」研究で感動の思い出数々

を最良の書とのみ申し上げておきたいと思えます。

さて、ここでは、私事に陥るかも知れませんが、私が杉田玄白について学んできた経緯や体験の中から、幾つかのことを述べておくことに致します。もう三十年余りも前のこと、当時、公立小浜病院長であった田辺賀啓先生から、小浜に伝わる杉田玄白自筆の文書に、わかりにくい箇所があるので解説してほしいと、その写しを見せて頂きました。このことが最初の機縁となり、私は杉田玄白について、特別な関心を抱くことになりました。それ以来、杉田玄白の優れた研究者であった田辺院長先生から、私は種々のお教えを賜ることとなりました。

17年度

風花随筆文学賞

平成17年度 風花随筆文学賞 授賞式



作家 津村節子さん（前列中央）を囲み表彰記念撮影

一般 川田さ(埼玉県) 最優秀賞 4122編・過去最高の応募

平成17年度の「風花随筆文学賞」（実行委員会主催、当財団特別協賛）の授賞式が3月11日、福井新聞社・風の森ホール（福井市大和田町）で行われました。

同賞は福井市出身の芥川賞作家津村節子さんの隨筆集「風花の街から」のタイトルを冠した文学賞で、平成9年度に創設、14年度から実行委員会形式に衣替えして発足、17年度で9回目となりました。

応募作品の選考委員長を務められた津村節子さんから最優秀、優秀賞の11人に、表彰状と賞金等が贈られました。

主催者の挨拶のあと、津村さんが「原稿用紙5枚以内という量はフコにとっても難しい範囲ですが、人生の重い課題を盛り込むなど、優秀な作品ばかりで選考に苦労しました」と、入賞作品の一つ一つに講評が行われました。

同賞には、一般の部1270編、高校生の部2852編と過去最多の4122編の応募が寄せられました。

入賞の皆さんは次のとおり。

（敬称略）

一般の部

- ▽最優秀賞・福井県知事賞 川田さ理子（埼玉県）「初めてもらった酒席」
- ▽優秀賞・福井新聞社賞 山本真子（東京都）「竹人」
- ▽同賞・仁愛女子短期大学賞 山根幸子（広島県）「口紅」
- ▽同賞・げんでんふれあい福井財団賞 山岸美（越前市）「お兄ちゃん」
- ▽同賞 松尾文雄（東京都）「神様の握り飯」

高校生の部

- ▽最優秀賞・県教育委員会賞 安井佐和子（富山県）「すみ高校」
- ▽同賞 山元梢（大野高校）
- ▽同賞 野良猫ラウター
- ▽同賞 仁愛女子短期大学賞 栗田愛司（鹿高校）
- ▽同賞 げんでんふれあい福井財団賞 大橋茉莉奈（丹南高校）
- ▽同賞 伊藤舞（仁愛女子高校）
- ▽同賞 合田優（福島高校）
- ▽同賞 寄の道（言葉の始まり）

げんでんふれあい 福井財団賞

受賞作品紹介

誰が読むのかわからないものに、このことを書くのはためらわれた。しかし、今私が思っていることや、周りの環境は日々変化し続ける。だから、この機会に、私は現在抱えている複雑な思いを、ここに記そうと思っ

現在、私と父親の間には余話がない。同じ食事につくこともなければ、一緒に外出することもない。そんな感じで三年余りが経ってしまった。別に私は父と距離なんてしていないし、ましてや勘当されたわけでもない。いつの間にか、そんな緩やかなスピードで、私と父の間が離れていった。父が長年勤めていた会社から独立し、忙しさに追われている

気分だった。父は仏頂面で黙っている。私はそんな父に何も言えない。車内が静く、静けさが怖い。どこか遠くは向だが、ろくに家族と顔も合わないフクロウと共通の話題なんて思いつきもしないし、父と同じ空間は気持ちが強張ってしまっている。結果でも強張ったように背すじがたない雰囲気が出てきて重苦しくて寂しい。車内には昔と同じ洋楽のラジオが流れていたのに、隣にいる父親はもう違うのだと、迷惑させられた。

でも私は、父を嫌いにはならなかった。寂しさや苦立ちを感じても、激しい怒りは全く湧いてこないのだ。それは変化がゆっくりすぎたせいだが、それとも半に親

「いつか両親を温泉旅行に連れて行ってあげたいです。それが僕の親孝行です。」最後に言ったその一言で、私の涙は頬を流れ落ちた。

あの時は高校3年生で、まだ進路も決まっていなかった。母が一緒に旅行に行かないかと誘われて行ったのは、程度の知的障害者が働いている「ひまわり作業所」の文化祭だった。そこで私の兄も働いていた。

私の兄は今年二十二歳になる。昔から同りの子より少し覚えが悪い方で、比較的覚えが良かった妹の私といつも比較されていた。私もそんな兄をバカにしてしまう時が多々あり、ちゃんと言われた通りできるか不安で、兄の事を気にする場面も多かった。たった一人のお兄ちゃんなのに、一々なんでお兄ちゃんが先に生まれたんだろ。お兄ちゃんらしいお兄ちゃんが好きだし、「と

生言わく、遅い思春期らしい。そんな時も必要なんだな、とやさしい目で見てあげる事ができた。小さい時から怒られたり、責められてはつかで、自信が無いまま体だけ大きくなって、汗心の心は反抗期も思春期も迎え止まっていたのだとその時思った。これからは、焦らずゆっくり進んでいけばいい。今まで兄を見下していた自分が恥ずかしくなった。繰り返れば、「妹美は？」と気にかけてくれたのは、いつも兄だった。心配してくれるのも兄だった。私が小さかった頃、大におびえていた私を助けてくれたのも兄だった。気がつけば、兄に助けられてはかりだった。こんなに互に互に助け合っていた。兄はそんな私を一度も責めたり怒ったりしなかった。誰とも嘲りきれないほどの思いがあった。お兄ちゃんがお兄ちゃんだからだった。

うちに、家庭から離れていってしまったのだ。また、彼が家を遠ざけるようになった理由の一つに家庭内の状況にも原因があると、母に教えられた。昔、私の両親は父方の祖父母との間に多くの問題を抱えていたらしい。根が真面目な父は、仕事や家庭で生じたストレスや不満を自分の中に閉じこめたままにしてしまった。どれだけ神経がすり減っていたのか私には想像もつかない。ともかく、そんな環境

高校生の部 優秀賞



家族のこれから

大橋 茉莉奈さん

(福井県立丹南高校)

の中で変わってしまった父と、私は他人同士のような共同生活を送っている。

私は自ら課題を持ち出して喋ることが苦手だったし、父も似たように寡黙な人なので、もともと話す機会は多くなかった。それでも昔は、父親と一緒にいるとわくわくした。人のからかい方が上手な、面白い人だったので、相手をしてもらうのが嬉しかった。仲は良すぎず悪くもなく、ゆるい感じの通話が心地良かった。また、父は車が好きだった。今は廃車になってしまったが、私が幼い頃には黒のインテグラに乗っていた。休日には丹念に愛車を磨き、運転している車内にはいつも洋楽が流れていた。E.N.Y.Aなどは今聴いても懐かしい。車で遠出をした帰り、ぼつりぼつりを道に任せてたかたかた、母も交えて三人で話をしながら時折低く笑う父。もう戻ってこないひとときだと悲しく少し切しい。

数か月前、学校へ送ってもらったために、久しぶりに父の車に乗ったのだが、正直言っておもむねフクロウと回乗している

子だからなのか。結局のところ、親子関係は変わらない。疎遠になっても父は、私の「お父さん」だった。会話をしなくなった今になって「お父さん」は何ものにも変えられないという気持ちに気がついた。父の変化に家族が戸惑ってしまっているのは、昔の優しいお父さんを知っているからだ。

最近、私はよく父の片鱗を拾い上げて友人に話す。現在のことはなく、昔

のことを。そうすることで「お父さん」は温かく存在してくれる。「昔に戻ってほしい。」と願うことも多少あるが、「一度離れてみて家族がどんな存在だったのがわかるのもいいと思う。私は進学に伴い、一人暮らしのために家を出る。一人でいる間に、ものの考え方を成長させたい。私が思っていたことを上手く言葉にできるようになってから、ゆっくりに話をしたい。それまでに、父がもう少し柔らかくなってくれていることを願う。

変わらないものは何も無い。私は父のことでそれを学んだ。変化にはたくさんリスクがつくかわりに、人を成長させる。以前までは、家族について考えることなどあまりなかった。父との関係を可能な限り修復して、また普通に話せるようになるのが、今の私のささやかな夢だ。それに、無常だと聞いても葉がりは変わらないことを私は知っている。

だから、今はE.N.Y.Aでも聴きながら、昔の思い出に、ゆっくりにつかってほしい。JULIA。

一般の部 優秀賞



お兄ちゃん

山岸 麻美さん

(越前市)

かっと思つた。

そして思い切って母が福祉関係の人に相談してみた。後日、カウンセラーや簡単なテストを受けた結果、知的障害者として認定された。私は複雑な思いだった。見た目も中身も普通の人と変わらないし、何より「お兄ちゃん」＝「知的障害者」として受け止められなかった。その反面、安心もした。「もう人と比べられずに、お兄ちゃんのペースで暮らせる。辛い思いをして働かなくていいね。」家族の誰もがさっと思っていたと思う。そして、お兄ちゃんの「ひまわり作業所」での生活が始まった。久しぶりに家族に笑顔が戻った。母と祖母の涙は、今までと違い暖かさを感じられた。

兄はそこでナンブサッカーとマシンゲームをしていた。世間から何と問われようと、立派な仕事だと思った。嫌そうなお顔をしながら出て行き、帰るのも同じ顔して帰って来た昔とは全然違う兄がいた。いきいきと「行ってきます。」という兄の一言が祖母も私も何より嬉しかった。たまに不機嫌だったり、仕事に行きたがらない時があったり、「辞める。」と言った時もあった。作業所の先

思えた...

文化祭。今まで一緒にあった事のない友達とたくさん出会えた。みんな笑顔が素敵だった。初めに、作業所で働いている人達による作文発表があった。兄は惜しくも代表に選ばれなかったが、兄の仲の良い友達が発表するの聞いていた。けんちゃん(兄の友達)はずいぶん緊張している様子だったが、一生懸命読み上げていた。私は兄とかなって見えて、作文で言っている言葉一つ一つ

が兄の言葉に聞こえて仕方なかった。「いつか両親を温泉旅行に連れて行ってあげたいです。」兄が言ったわけではないのだが、うれしくて涙が止まらなかった。泣くまいとどこかで格好つけていた私は消え、大きな拍手をしていた。

文化祭の後半。いよいよ兄の登場だ。「西遊記」の劇で兄はチョッパッカイの役を見事に演じていた。踊りもセリも完璧で、いつしか兄を尊敬していた。

最初は言っていたが、文化祭に行くとよかったですと心から思った。どんな兄であろうとたった一人の兄弟。大事にしていきたいと心に決めた瞬間であった。「ありがとう」「ごめん」。そして「これからもうゆるいけれど、どれも照れ臭くて口には出さないが、ずっと兄には話さず伝えてくれているだろ。なっで兄弟ですから。

兄に教わるものはないと思っていたあの頃。むしろたくさん兄の事を教えてもらった。祖母さんになるうと決めたのも、あの時の文化祭のおかげだ。私もたくさんの子供達に、兄がらもつたものを教えていきたい。

国選択無形民俗文化財 宇波西神社の神事芸能

若狭町
気山

国選択無形民俗文化財となっている若狭町気山の宇波西神社の神事芸能・王の舞などが4月8日、同神社の境内広場で、奉納されました。舞場周辺には大勢の見物客が詰めかけ、古式ゆたかで、舞手の力強く、荘厳な舞に、大きな拍手が湧き、伝統芸能の奥ゆかしさに浸っていました。

若狭町気山（小字・寺谷）に鎮座する宇波西神社は、鶴早書不合碑（うがやふきあえずのみこと）を祀る延喜式内社で、社伝によると、神名帳には「宇波西神社、名神大、月次・新嘗」と記されていて、古くから特別に朝廷の崇敬を受けてきたという格式高い神社です。

この神社の氏子集落は、三万五湖周辺に散在しており、旧三方町と美浜町にまたがって現在は日集落、約千戸を数えます。旧三方町では気山（小字・中山・市・中村・寺谷・切海・宇）・北庄・海山、美浜町では、日向・笹田・久々子・松原・郷市・金山・大蔵・牧口の各集落が氏子区域になっています。



太鼓の曲にのり、「三々九舞の舞」を演じる三の舞（倉山区担当）

これらの氏子集落は、宇波西の神を共同の氏神として祀っていると同時に、各集落ごとにそれぞれ自分の集落の氏神を祀っています。つまり神事が二重構造になっていて、例祭の前日までに、それぞれの集落で自分の村の氏神を祀って神事を行い、翌日の例祭には各集落から自分の村の氏神の御幣を捧げて宇波西神社に参集し、それぞれ供物を献じ、担当の芸能を奉納します。

神事芸能の起源・縁起

宇波西神社は、平成13年に、創建1300年祭が斎行されていますが、神事芸能がいつ頃はじめられたのか、その起源

は定かではありません。しかし、

海山区に現存する王の舞の衣装箱に「元禄三庚午年三月」と書かれていることから、元禄時代（1690）にさかのぼることが推定されており、さらに、宮司室に現存する「歌文」（祭礼の詠人名を記したもの）の最も古いもので天明7年（1785）のものがあることから、その頃に既に王の舞その他の祭礼が行わ



宇波西神社 正西

れていたものと思われる。

気山諸頭と集落神事

各集落ごとの神事は、集落によって、差異がありますが、気山区では、宮司制度があり、神事はすべて諸頭によって営まれます。4月6日早朝、諸頭全員（現在5人）が海まで行って水取りをとり、帰りにホンダフラと砂利を拾って帰ります。

午前9時、諸頭全員が羽織、袴で神社の儀礼殿へ集まり、初献の儀から六献の儀までの神事が執り行われます。その間、



頂屋の庭先に高くと立てられた「オハケ」の先崎

「オハケ作り」や「オハケ立て」「板の魚直し」が行われます。

オハケ立ては、張屋の庭先に、長さ6メートルほどの竹の先にオハケを結びつ

宇波西神社関係村落圏



け、高く立てられます。オハケは神霊が宿るヨリシロといわれています。神事がすむと8日の例祭に奉献する御供づくりにかかります。

その主なものは、シロムシ（白蒸）で、うるち米にも古米をまぜて蒸したものを一升ます大の角型にして、美濃紙でくるんだもの。その他、干物にしたカレイ、海藻などの御菜も用意されます。

どの集落でも、大体これと似かよった神事を行って、例祭当日を迎えるようにす。

当日は、早朝から9時半頃にかけて、予め決められた時間帯に、各集落の頭屋の人達が御供物を捧持して、神社に参集します。

特に、神社祭礼に重要な役目を担っている日向の集落では、その出発の行列の先頭には、神社と縁の深い遠辺六郎右工門家の当主が宝剣を捧げて行列を進めます。服装は浴衣帽子、黒袍を着、紺色の腰を肩から胸にかけて。当主のあとには、白い幣を持った幣さしが続き、その他の人々は浅黄色の袴姿で護衛します。御供の御菜はゴサイブネと呼ばれる手漕ぎの舟に積み込み、日向湖を2度で漕進

王の舞

鉾を突き上げ荘厳の舞展開

して宇集落の浜に並び、御供物を少三連が背負って、神社へ向います。
こうして、各集落の献酬が終了すると大祭の儀が執り行われます。



ヒー ヒャーリ ヒヨ、ヒャー
ヒャーリ ヒヨ…第と

扇甲や衣裳は各集落と持っていますが、黒二面と鉾は当口、宇波西神社所蔵のものを使います。

で奉納します。今年は、金山区が当番にあたり、この大役を金山区出身で新潟県内の大学院に通う平城慶良さんが務めました。境内にある王の舞堂という仮屋を宮として舞人の衣裳をこのえます。

衣裳は、赤い狩衣に裾端をかざる、裾袴、輪袷袋を着て、烏甲をかぶり鼻高面をつけ、白足袋、手袋姿で鉾を持って登場し

大祭の神事が終わって、午後一時過ぎ、渡辺六郎右門家の当主が并殿前の石段に立って、境内を見おろす形で立剣を掲げると、宇波西の神に奉納する民俗芸能の開幕となります。



日向・渡辺六郎右門家当主、立剣を掲げると神社参道の民俗芸能が開幕。并殿前の石段

王の舞は、宇波西神社の祭の中心となつてくる芸能で、海山・北庄・大越・金山の各集落が定められた順番に従って毎年交替

大勢の音楽の吹奏と黒袍・烏帽子の披露をつけた若者の太鼓打ちの劇子に合わせ、扇甲から太鼓を渡り、舞場まで、道中、道を繋ぐ所作を繰り返しながら、道中の舞「石段前の広場に入ります」。

舞は、五方に刀槍く鉾を突くように舞い、後段は素手で、地面を踏みしめながら石段の前で舞いを納めます。舞は、集落毎に舞い方や劇子が少しずつ違いがあるといわれており、金山では、「道中の舞」「三三九度の舞」「一本舞」「一本舞の舞い戻し」「すすめ舞」「おてての舞」というような構成になっていきます。演技時間は約40分程度。

舞の最中に鉾手を転ばせると悪作悪運になるという言い伝えがあり、境内ではすきを足で踏ばせようとするとすきと鉾を持った舞団役との小競り合いの場面も時折あり、一回から大きな歓声と拍手が沸き起こっていました。

獅子舞



悪魔払いの舞を演じる「獅子舞」一郷市区の青年達

王の舞がすむと、同じ広場で獅子舞が登場します。精進頭と青年のうち、2人が獅子の頭と尻に入り、他の2人は小さな鎮打太鼓を手に、獅子の左右に從つて獅子あやしめ役をつとめます。舞場を左回り、大きな口を明けたりしながら悪魔払いの舞を演じ、約3分間はどの激しいながらも静かな舞を披露します。



ピンザサラを圍らし伝統の「田楽」の舞を披露する日向区の舞人

田楽

をよく残しているといわれています。獅子舞は、郷市・松原・久々子の3集落が毎年交替して奉納し、今年は、郷市区の青年が当りました。

「田楽」は、ピンザサラの使い手4人と鼓一人は、青色の素袍に烏帽子をつけ、黒木綿の市布に切袴で烏帽子姿の小鼓打ち2人、合計7人の構成で、向き合ったり、円陣を作ったりして、それぞれの楽器を鳴らしながら舞います。所要時間は、約7分間ですが、中世の芸能を伝えているといわれています。奉納集落は、日向と牧口が交替してつとめています。今年は日向区がこれに当りました。



威勢よく境内を駆けめぐる気山区の「子供みこし」

子供みこし

最後に、旧三万町気山の子ども連(気山小の児童)20人が御旗をかつぎ、リーダーの指揮のもと、威勢よく境内を駆けめぐり、宇波西の神の斎祭りを通り上げていきました。

放浪の俳人 種田山頭火句碑

永平寺町



大本山永平寺の参道入口右側の杉の木立の中に3句が刻まれた山頭火句碑



54歳当時の山頭火

曹洞宗大本山永平寺、ここから津城といわれる終門入口と龍門の間の杉の木立に囲まれた感土の空地に、漂泊の俳人・種田山頭火(たねださんとうか)の名跡三句が刻まれた句碑が建てられています。

・水音のたえずくま 御侍とあり
・マユマユ ひらひら いらかどこえた
・生死の中の 雪降りしるる 山頭火

碑は、高さ約1・6m、ほぼ四方角型の自然石。その3面に、上掲の句が刻まれています。山頭火は昭和11年(1936)7月、墨染の衣に袈裟をかけ、一笠一鉢一杖の行脚僧の風姿で、永平寺に参籠し、名句を残したことを偲び、平成2年7月9日、永平寺山頭火句碑奉賛会の手によって、この句碑が建立されました。

山頭火は、明治15年(1882)12月、山口県防府市に、父・種田竹次郎、母・フリの長男として生まれ、本名は正一と名付けられました。

当時、種田家は近在屈指の大地主で、外兄は何不自由ない暮らし向きであったといわれています。しかし、少年正一が8歳の時、母フサが自殺。この一家の不幸は山頭火のその後の人生に大きな影響を与えたと自ら回想しています。

明治32年(1899)、私立周陽学会



(3年制を経て)県立山口中学校の4年級に編入、明治34年8月、同校を卒業。翌年、早稲田大学創立時の最初の入学生として、同大学文学科に入学、文学への道を目指します。しかし、明治37年2月、病氣療養のため大学を退学、帰郷することとなります。その頃、種田家の屋台骨は、屋敷を切り売りするなど、大きく揺らぎ始めていました。明治42年8月、山頭火は佐藤サキノと結婚。妻子ある一家の主となりますが、徐々に無軌道な酒におぼれるようになり、ただ熱心だったのは又書活動でした。郷土の文芸誌「青年」に参加、山頭火の句で翻訳などを発表。田村公の旧号で定型俳句を作り、俳友た



碑右側の句



碑左側の句



観光客でにぎわう永平寺参道

ちこの交流もしきりでした。

一方、大正2年(1913)俳人萩原非泉水に師事、大正5年には俳誌「雁雲」の俳句選書の一人に依託され、自由律俳句に精進、全国的に頭角を現わすまでになっていきます。一方、種田家は破産、山頭火は、妻子を連れて熊本へとおちのびます。

大正8年、単身上京し、移り住みますが、長抗せず、再び熊本へ帰り、大正14年、出家得度して、耕政と改名、禅門の人となります。大正15年(1926)安住の地も捨てて、全国各地へ放浪流転の旅に出ます。

彼自身がつぶさに書いた行記による次のように記しています。

「歩がない日はさみしい。飲まない日はさみしい。作らない日はさみしい。ひとりであることはさみしいけれど、ひとりである、ひとりで飲め、ひとりで作ってあることはさみしくない」と。全国各地を巡り、多くの口語自由律俳句をつくりました。

昭和5年(1930)10月11日、松山市の一草庵で集められた句会で急死します。享年57歳でした。



「小野小町図」

土佐光起筆

絹本着色

縦34・8 横84・7cm

江戸初期

賛 色も香も／なつかしきかな

かわすなく井手／のわたりの

山吹の花

落款「土佐左近衛守監光起筆」

印章「慈照」朱文方印

本図は、平安前期の女流歌人で三十六歌仙の一人に数えられる小野小町の姿を描いた作品です。

垂髪に豊頬面長な小野小町が、単に五衣を重ね袷袴を着用した女房装束姿で、膝前に五色の糸で飾った検印を置いて正座しています。

注目されるのは、ややまなじりの上がった涼やかな目元や、豊かな鼻梁の下に小さな花卉を想わせる唇の描写で、これらは大和絵伝統の美人顔とされる「引目鉤鼻」とはいささか異なり、光起特有の気高くも端正な相貌をよく表出しています。また左右に流れる黒髪の微細にして暢達な細筆、筆力が充実した衣紋の描

線、さらに鮮麗な設色とその上に描きこまれた文様など、いずれも宮廷画家・土佐光起の本領を発揮した作品といえます。

賛の和歌は「新後捨遣和歌集」巻歌下に「題しらず」小野小町の歌として収載されています。賛の筆者は、古い時代箱蓋に「風早中納言実種」との題書があることから、姉小路公景の男で風早家の始祖の風早実種とされています。実種は、権中納言正三位、茶道と香道に長じ、宝永7年(1710)、79歳で没。

筆者の上佐光起は、土佐光則の息子で、承応3年(1654)、38歳のときに従五位下、左近衛右衛門に叙任、剃髪して法名を常昭としました。

延宝9年(1681) 65歳、法橋。貞享2年(1685) 69歳のとき法眼に叙任。元禄4年(1691) 75歳で亡くなりました。

平成18年度 財団助成事業決定

113件・助成総額2,197万円

県内の文化団体等の事業活動を支援する平成18年度の財団助成事業は、4月末日で公募申請を締め切り、4月4日と5月11日の2回に分け、選考委員会を開催し、慎重な審議を行いました。その結果の答申をうけて、本年度は113件、2197万円の助成交付金を決定しました。

平成18年度 財団助成事業交付金一覧

事業大別	助成対象事業	団体数	助成交付金 (万円)
地域文化の振興事業	郷土の歴史・文化の保存伝承事業	17	3,200
	市民文化団体等の活動事業	32	5,900
	国際文化交流事業	3	570
	文化アドバイザー派遣事業	1	1,000
	文化のまちづくり事業	16	2,850
ふれあい及びゆとりの創造事業	ボランティア団体等活動事業	10	1,000
	各種文化サークル活動事業	15	1,500
	福祉施設等地域づくり事業	5	800
芸術鑑賞機会 の提供及び文化 創造事業	優れた芸術公演・展示開催事業	5	1,550
	市民参加型芸術文化活動事業	6	2,100
福井県高等学校総合文化祭育成事業		1	1,500
合計		113	21,970

ふれあい
げんでん

コンサート2006

5/13

原田真二&大黒摩季さん熱演

福井

財団主催、げんでんふれあいコンサート「原田真二&大黒摩季・スベシャルライブ」(日本原電協賛、福井放送後援)が5月13日、福井フェニックスプラザで開きました。

ライブは、会場全体がカクテル光線に彩られるなか、ミュージシャン原田さんが突如、客席からステージに登場して開演。ギター、ドラム、サクソフォーン、キーボードで構成されたバンドの伴奏で、原田さんがエ



デュエットで熱演する大黒さん(左)と原田さん(右)ー福井フェニックスプラザ

レキギターを弾きながら「Modern Vision」でスタート、続いて、ヒット曲「CANDY」などを披露。曲の合間には、「デビュー以来の思い出など懐かしくトークを話し、「上を向いて歩こう」や自ら作曲した「校歌」では、ピアノを弾きながら独唱、客席から拍手も加わり、会場を盛り上げました。後半、歌手の大黒さんが登場。「ら・ら・ら」を手を振り上げながら歌い始めると、客席は総立ち、手を左右に揺らす声援の波で会場を沸かせました。また、映画・アラジンのテーマ曲「A Whole New World」を原田さんとデュエットし、大きな拍手に包まれました。最後に、アンコールに応え、「Tears on Glass」を2人で熱唱、約2千人の聴衆を前に、迫力あるステージでフィナーレを飾りました。

コシヒカリ 第2回国際賞 育成50周年 シンポジウム に協賛

4/15

「コシヒカリ育成50周年記念表彰式と「ごはん」について考えるシンポジウム」(県、コシヒカリ国際賞実行委員会主催、当財団後援)が4月15日、福井市の県国際交流



基調講演する早稲田大学 鈴木正成教授

会館で開催されました。コシヒカリ国際賞の表彰では、アフリカ研究センター百種主任のムサ・シエ博士(国籍・ブルキナファソ)と、サンパウロ大学ヒラシカーバ農科大学名誉教授安藤晃彦博士(国籍・ブラジル)が表彰されました。

シンポジウムでは、早稲田大学の鈴木正成教授が「和食ごはん食の文化性と健康性」と題して基調講演が行われ、ごはん食は肥満防止や長寿に大きく寄与すること。ごはんの朝食は「生きるため」

早稲田大学 鈴木教授

ごはん食の文化性 健康性を講演

「国のため」に食べることに通することなどを指摘していました。

その後、「コシヒカリのふるさ

とで、ごはんに「ついて来る」「パネルディスカッション」にうつり、早大・鈴木教授をコーディネイターに「焼きそば寿司」で有名な「海の恵み」代表の矢部みち子さんや県指導農業者の中川清さんら4氏がパネリストとして事例が発表されました。特に、朝食を食べない子どもへの対策が話題となり、来場者からも発言が相次ぎ、正しい食習慣と健康維持を目指す条例化や、朝食抜き子どもへの給食制度など健康食の源である「ごめ」の魅力を訴えていました。



コシヒカリ育成50周年記念表彰式後に開かれたシンポジウムー福井県国際交流会館

錦 耕 三 「若狭路の暮らしと民俗」
遺稿集Ⅱ

財団、若狭路文化研究会 共発 同刊



「王の舞」の詳しい所作を図示したり民俗調査の貴重な記録を綴った「若狭路の暮らしと民俗」

当財団と若狭路文化研究会が共同発刊の形で取り組んできました。錦耕三遺稿集Ⅱ「若狭路の暮らしと民俗」(A5判、全531頁)が、このほど刊行されました。

この図書は、昨年刊行した「若狭路の祭り」と並んで(遺稿集Ⅰ)の続編で、錦耕三遺稿集全2巻がここに完結したことになります。

今回の遺稿集Ⅱは、有名な「宇波両神社の春祭り」をはじめ「村の暮らしと民俗」、美浜町新庄の民俗誌である「若狭新庄民俗探訪録」の3部構成でまとめられています。新聞記者であり、民俗学者であった錦耕三さんが昭和20年、戦中から戦後10数年にわたり、旧三方郡を中心とした若狭地方の伝統芸能をはじめ祭りや各種民俗の調査、探訪を続け、収録した調査で、膨大な資料が、ここに編纂され、編集されたものです。完結までには、好余曲所がありました。郷土の民俗研究者、小林一男氏の宿願ともいえる協力、解説・編者として千葉大学橋本裕之教授らがあたられ、民俗文化の貴重な文献の発刊となりました。

財団新専務理事に
市橋一義氏



財団・山田敏廣専務理事の退任に伴い、7月1日付けで、市橋一義氏が新・専務理事に就任しました。市橋氏は、政智市助役、福井県県

民生活部長等を歴任。その後、福井県中小企業団体中央会専務理事を務め本年5月に退任。現在就任。

就任の「挨拶」

(財)げんてんふれあい福井財団
専務理事 市橋 一義

財団が設立されて、今年はやや年目、来年は創立10周年という節目の年を迎えます。このような重要な時期に、重責を担うことになり、私にとって、初めての新しい分野への挑戦だけに、身のひきしまる思いであります。

昨年、福井県で第20回国民文化祭が開催され、本県の歴史や文化で「元気福井」をアピールすることができ、その感動を分かち合いました。これらの進捗

を引き継ぎ、今や、次の新しい時代に向けてふくいの文化の道を拓いていくことが求められています。わが財団も、福井県の文化の振興とゆとりとふれあいのある地域づくりを、微力ながらお手伝いする立場から、今日まで培ってきた絆を大切にしたい。地域に根ざした財団として、頑張っていきたいと思っておりますので、前任者同様ご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

上げます。

坂井市誕生記念
三國祭り山車 新調に協賛

「桃太郎」山車旧4町民が引き手

坂井市 三國町

5/20

北陸3大祭りの一つで、本年4月には、福井県の無形民俗文化財に指定された坂井市の三國祭りは、中日の5月20日、呼び物の武者人形を乗せた7基の山車が参加し、三國旧市街を練り歩きました。

今年も、坂井市が誕生し、これを記念した山車「桃太郎」を三國祭保存振興会が新調。げんてんふれあい福井財団も助成事業を通して、これに協賛しました。



三國祭りに坂井市誕生記念に出演した「桃太郎」山車。新調に当財団も協賛

手に参加、遊行のしんがりを務めながら、新しい町づくりとあわせて、伝統文化の心算気をかみしめていきました。

三國祭りは、江戸時代、三國湊が隆盛するともににぎやかとなり、宝暦年間(1751-1764)に山車が曳かれはじめ、安永(1772-1781)ころには、今のような武者人形

を載せるようになったといわれています。

正午ごろ、雨模様の中に7基の山車が三國神社前に集結。遊行の開始のころには雨も上がり、武田信玄や山内一豊など高さ6メートルを越す巨大武者が次々と町内に繰り出しました。坂井市誕生を祝う山車「桃太郎」は一般公募の人たちや旧丸岡、春江、坂井の町民の方々が引き

手に入れた。旧三國町には18台の屋台があり、各町内が当番で、毎年6台を曳き出し奉納します。屋台には武者人形を載せ、その高さ6・5メートル、子供たちの太鼓、三味線、横笛の靡子を鳴り響かせ、細い小径の町中を這うように進み、町中熱気に包まれます。

第9回 ふるさと大賞2006 写真コンテスト作品募集



第9回ふるさと大賞作品「持ち上げる!!ガンバレ!!」
三浦明彦氏(坂井市)

賞金

ふるさと大賞	1点	賞状・トロフィー賞金30万円 <small>※1名につき、賞状は2枚、トロフィーは1枚、賞金4万円(20万円とする)</small>
ふるさと賞	3点	賞状・トロフィー賞金 <small>小学生5万円1名 / 中学生5万円2名</small>
優秀賞	5点	賞状・トロフィー賞金 <small>小学生5万円2名 / 中学生5万円3名</small>
入選	30点	記念品 <small>小学生500円5名 / 中学生500円10名</small>
佳作	30点	記念品 <small>小学生500円5名 / 中学生500円10名</small>

募集要項

- テーマ ここに「ふるさと」がある～福井の感動～
- 部門 学生の部(高校生以上)、一般の部、の2部門。
- 資格 ●福井県に在住又は学校・勤務先が福井県内であること。
●写真の専門家(プロカメラマン)でないこと。
- 作品 応募点数は制限しません。ただし応募者本人が県内で撮影し(2004～06年に撮影されたもの)、未発表作品に限ります。
- 作品の規格 カラー・モノクロで4寸切又は4寸切Wの半サイズ。
- 応募方法 所定の専用応募用紙に必要事項を記入し、作品の裏にセロテープで貼って提出してください。
- 締切 平成18年12月8日(金)(当日消印有効)
- 発表 審査会を経て、平成19年1月下旬。入賞作品については、ご本人に通知いたします。
- 表彰会 ●表彰式(優秀賞以上)平成19年2月7日(水)「ふるさとの日」
●入賞作品は、敦賀、坂井市の2会場で「入賞作品写真展」を開催します。
- その他 ●入賞者には入賞作品の原稿(ネガ等)の返出をお願いします。
●応募作品は返却しません。ただし返却を希望される方は封筒に「返却希望」と朱書きし、500円切手を同封してください。
●入賞作品の採用著作権は主催者に帰属し、財団のPR活動に使用させていただきます。
- 応募先 ①T914-0001 敦賀市木町2-9-10
(財)げんでんふれあい福井財団
TEL0770-21-0291 HP http://www.fuenden.or.jp
②福井県カメラ商組合/県内フジカラー取扱店

主催：(財)げんでんふれあい福井財団

後援：福井県/福井県教育委員会/敦賀市/敦賀市教育委員会/(社)福井県文化協議会/福井県高等学校文化連盟/(株)福井新聞社
福井放送(株)/福井テレビジョン放送(株)/(株)福井ケーブルネットワーク
協賛：福井県カメラ商組合/富士写真フィルム(株)/フジカラー北陸(株)

財団イベント INFORMATION

スーパージャズライブ	ジャズピアニスト 松永貴志	7/22(土)	福井市響のホール	福井テレビ主催、財団協賛 (前売り)3,500円
ニューヨークジャズ コレクション2006	女性5人によるグループ 「FIVE PLAY」	9/23(金・土)	福井市響のホール	まちづくり福井県主催、財団協賛 入場料4,000円(予定)
海・山・音楽 福井ロックフェスティバル03	福井県出身の アーティスト出演	10/14(土)	福井市響のホール	FM福井主催、財団協賛 入場料2,500円(予定)
第10回福祉演芸会	長谷川一義(津鯉二味線) 林田麻友子(歌手)	10/17(火)～19(木)	県内6福祉施設	財団主催、無料
能・狂言鑑賞会	味方玄&茂山一門他	11/17(金)	敦賀市プラザ東象	財団主催、無料
げんでんふれあい コンサート2006	創作オペラ「つゆかの魔笛」 言白浩之&大和田伸也	11/25(土)	敦賀市民文化センター	財団主催 入場料2,000円

